巻頭言

2020年度に、新型コロナウイルス感染症の影響を受けられたみなさまにはまず、お見舞い申しあげます。本学司書課程にとっても混乱するような、しかしある意味、エキサイティングでもあったこの一年の記録として、*St. Paul's Librarian* 35号を編集し、お届けします。

図書館にとっても大変な一年であったのに、図書館実習は前年度に受入れを内諾してくださっていた全館がほぼ予定どおりに実施してくださいました。これに対しては、実習に伺った学生と共に、心より御礼申しあげます。夏に少しは感染拡大が収まったとはいえ、実習に行くことができるかどうか、初日になるまで学生も私ども教員も不安でした。しかし、すべての図書館が実習を実現してくださったのです。記憶に残るできごとでした。

2020年は本学司書課程にとって、別の意味でも新たな転換期に向かう一年でした。年度がかわったところで、ハモンドエレン特任教授が年度末での退職を決められ、夏からは後任人事がはじまりました。数年おきの特任人事は司書課程の方向性を決める作業でもあり、春から夏にかけてはオンライン授業の実施の試行錯誤をしながら、新しい大学教育と司書課程の将来について考えました。無事に人事が終わったところで、2021年1月22日（金）の午後にハモンド先生の最終講義が行われました。本誌巻頭にその記録を収載しております。

また、2019年度より「児童サービス論」にご出講いただいている青柳啓子先生から、受講学生の学修成果をお届けいただくとともに、ご自身の研究成果を寄稿していただきました。児童サービスに関わる司書養成教育の研究は日本ではまだ多くありません。青柳先生の今後のご研究の進展に期待しております。研究ノートとしては、続けて、翻訳を3本、掲載しています。

最後に改めまして、ハモンド特任教授のこの3年間のご在職中の献身に対して、ここに記して感謝いたします。ハモンド特任教授には、イエール大学図書館での19年の勤務の後、来日（帰国）したところで本学司書課程への着任を打診しました。ふたたびしばらくは日本を離れるということですが、日本で後進の育成に力を尽くしてくださった成果を、私どもはこれからも実感することになると確信しています。どうぞお元気で、さらなるご活躍を祈念いたします。

中村　百合子
（立教大学司書課程主任）